

令和7年度 特別支援教育セミナー

12月26日(金)、本校体育館に於いて特別支援教育セミナーが開催されました。当初8月1日(金)の実施予定でしたが津波注意報の発令に伴い安全に考慮し延期となりました。2名の先生方による発表は特別支援教育の専門知識や日々の支援の在り方について理解を深めるものとなり、とても充実したセミナーとなりました。

お忙しい中、また寒い中多くの方にご参加いただき、大変ありがとうございました。



事例発表① 「愛着障害の問題とその支援」

○沿岸南部教育事務所 スクールカウンセラー 相談員 後藤 早苗

「愛着(アタッチメント)」に関する基本的な知識や支援のポイントについて具体例を交えながら発表していただきました。全国的な傾向として増えてきている「気になる子ども」に対して、愛着の問題が関与している可能性に「もしかしたら」という視点をもって関わることや、その場合の組織的な支援とキーパーソンの重要性を学びました。

アンケートより

- ・子どもたちの行動や特性を見取る際、発達の特性的みではなく、背後の愛着の育ちも視野に入れながら関わっていきたい。
- ・キーパーソンの存在、先手の支援、感情のラベリングなど、支援のポイントを知ることができた。生かしたい。

事例発表② 「2つの現場から見た支援のかたち

～特別支援学校と小学校特別支援学級の実践から～

○岩手県立気仙光陵支援学校 教諭 菅野 秋穂

特別支援学校と特別支援学級の経験からそれぞれの教育の場の特徴や授業内容、支援内容などの具体例を発表していただきました。環境や制度は違っていても共通することは、地域社会で「自分らしく生きる力」を育むこと。そのために日頃の教育活動の中で自己選択・自己決定、他者と関わる力、「できた」「わかった」の積み重ねが大切であると学びました。

アンケートより

- ・子どもの将来像を考えながら指導・支援していくことが大切だと感じた。
- ・特別支援学校と小学校の特別支援学級の取り組みから、違いや特色等を知ることができた。
- ・子どもに自信を持たせるための支援を心掛けたい。

協議 事例発表後に9つのグループに分かれて実施

「すでにやってきたことやあなたの強み」「今日から出来そうなこと、今日からやってみたいこと」を協議の柱として各グループで協議し、情報共有を行いました。



Q&A 当日付箋等に書かれた質問に講師の方に答えていただきました

事例発表①「愛着障害の問題とその支援」

Q.愛着の問題への対応と距離感が難しい。キーパーソンが担う役割として必要なことは。

A.キーパーソンが軸となり関係性をつくること。関係ができれば、キーパーソンが人間関係を広げる橋渡しをすること。そうすることで人が代わっても安心・安全であることが確認できます。キーパーソンは人間関係の適応力を身につけるためのきっかけとなる役割を果たします。

Q. 愛着の問題があると感しても各家庭の認識や度合いが違う。また、私たち(学校、施設等)が求めるものとは違ってなかなか共有できない。

A. 子育てに難しさを感じている保護者は少なくありません。保護者にかかるプレッシャーや過度な責任感、罪悪感等をお持ちかもしれません。保護者自身も安心や安全感を持てるようにすることが大事です。子育ては個人の頑張りではなく、環境も含めた総合的な取り組みです。社会的な支援を活用しながら、ともに取り組んでいくことを促しながら、実態を共有していくことが望ましいのではないのでしょうか。

Q. 愛着の問題があると思われる生徒と保護者に「こうすれば改善できる」という支援のポイント(こちら側の考える手立て)を直接伝えてもいいのか。また、保護者支援について知りたい。

A. 生徒や保護者の思いや悩みを聞き、それに寄り添いながら、改善策をともに考えていくのがよいのではないのでしょうか。特に保護者は、十分な対応ができずに困っていることが多いです。その困り感を十分に聞くことそのものが支援になりますし、共に考えてくれる支援者がいることは保護者の支えになるはずです。

Q. 発達なのか愛着の問題なのか見極めが難しい。どのような支援が望ましいか。

A. 「発達障害」は生まれつき持っている特性としての「先天性脳機能障害」で、「行動や認知の障害」です。一方、「愛着障害」は生まれた後に生じる後天的な、誰も愛着という関係性を築けていない「関係性の問題」で、「感情発達の障害」でもあります。障害の発生と所在の違いを踏まえることで、よく似た行動が生じていても、愛着障害と発達障害を見分けることができると言われています。そのようにアセスメントをしたうえで、支援を検討することが望ましいと思われます。

Q. 愛着の器の穴についてイメージがわからずどうしたらいいかわからないので、もう少し詳しく知りたい。また、器になっていないとはどういうことなのか。

A. かかわりを受け止める、こどものこころの受け止め装置を「愛着の器」と呼んでいます。

「抑制タイプ」は安全基地が築かれておらず、誰も守ってくれない、人とかかわっては危ないことだと思っているので、人とかかわりを避けようとします。ですので、叱られると安全を脅かされたと感じ止め、不登校や引きこもりの原因になることもあります。このような「抑制タイプ」は、受け止め装置が器にすらなっていませんので、どんなに良い支援、かかわりをして、かかわってもらっていない状態に等しくなります。

Q. 愛着に問題があると思われる児童生徒が暴言を発した際の対応について。

A. 愛着の問題がある児童生徒であれば、暴言に対して先生が叱ると、叱った人に反発し、責められた自分を守る自己防衛が働き、素直に受け止められず感情混乱が生じると考えられます。ですので、叱るという後手支援ではなく、先手の支援ができればそれに越したことはありません。ただ、実際は暴言はよくあることです。暴言を発したら、先生が感情をラベリングすること、先生がその児童生徒の気持ちを言い当てることで、自分の気持ちをわかってくれる存在がいると児童生徒が安心できることがよいかと思います。

事例発表② 「2つの現場から見えた支援のかたち

～特別支援学校と小学校特別支援学級の実践から～

Q. イラストカードの「選ばない～」の理解が難しい。そのような児童生徒への支援方法について。

A. 「選ばない」ということも表現の一つとしてとらえます。選ばないことで子どもが何を伝えようとしているのか考えます。注目してほしいのか、やるべきことからの逃避なのか、当てはまる気持ちカードがなかったのか、様々な場合があるかと思いますが、良い行動へ向かわせる交渉のきっかけにするとよいかもかもしれません。

Q. 学部スタンダードづくりについて具体的に知りたい。

A. 学部で様々な活動の基本形を作成し、スクールスタンダードにしています。

<メリット>

・ステージが変わっても長期間継続して取り組むことができる。結果、生活技術が高まり、1人でできることが増える。

・引継ぎ、継続も容易。

・引き継いだ学級にも、新入生にも即実行でき、学習が途絶えることがない。

*スタンダードはあくまでも基本形。学級の実態、個々の実態に合わせ変更することは可能。但し、その時の先生の考えでカスタマイズしすぎないことが肝心。

○黒板・教室配置 ○着替えの仕方 ○掃除の仕方 ○排泄後の始末の仕方

○朝の会・帰りの会の進め方 ○連絡帳の様式など

Q. 園から小、小から中と、学年進行に伴う引き継ぎ方はどうあるべきか。

A. 子どもの実態(困難さ、強み)についての他に、支援の引継ぎ(うまくいった支援、そうでなかった支援)も行くと、ステージが変わっても子どもが安心して過ごせるのではないのでしょうか。

Q. 保護者支援について何か心掛けていることはあるか。

A. 傾聴と共感・情報提供(福祉サービス、相談機関の紹介)や学校と家庭における子どもの様子についての情報共有を心掛けている。

Q. 児童生徒が暴言を発した際の対応について。

A. 短く簡潔な言葉で注意する、気持ちを受け止める、などします。必要に応じてクールダウンできる場所を準備します。個に応じた対応としては、子どもの気持ちが落ち着いてからどうすればよかったのか望ましい行動を一緒に考える、自己コントロールの方法を学ぶ、自分の気持ちを適切な言葉で表現する練習をするなどがあげられます。うまく対処できた時は、すぐにほめ良い行動に意識を向けさせます。暴言の背景にあるもの(不安やストレスなど)は何か察し、落ち着いた環境や信頼関係づくりに努めます。